

金閣寺出土の防火砂弾

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



上から



底から

見つかった防火砂弾

2003年、金閣寺の境内で調査をしていた時でした。普段は調査の対象にはならない、近・現代に掘られた深さ約1mの穴から、素焼きの全く割れていない土器が出てきました。よく見ると「砂弾」と文字が浮き出ています。その両側には「敵は米英だ」や「油断は禁物」という文字もありました。このような言葉は聞いたことがあります。「そうそう、社会科の授業

の時に聞いたような…」と遠い記憶をたどってみますと、やはりそうでした。太平洋戦争の末期ごろに頻繁に用いられた戦時標語(スローガン)の一部でした。

太平洋戦争が始まると「欲がりません勝つまでは」や「撃ちてしやまん」など、国民に我慢を強いたり、すべてを戦争中心に考えるような標語が街角のポスターや新聞紙面などに見られるようにな



金閣寺境内の発掘調査



左面「油断は禁物」

正面「爆撃機と砂弾」

右面「敵は米英だ」

裏面「記号と特製」の拓影

ったといえます。1944（昭和19）年ごろには戦争の長期化に国民の間に蔓延し始めた厭戦感^{えんせん}に対して、「鬼畜米英」などの戦時標語を用いて米英に対する敵愾心^{てきがい}を喚起しました。

ところで、「砂弾」とは何でしょうか。調べてみると、正式には「防火砂弾」といい、消火器の代用品として作られた陶製のものです。これを火中に投げ入れて容器を破裂させると、中に入れておいた砂が飛散して消火するためのものとわかりました。初期消火にはそれなりに役立ったようです。

1938（昭和13）年の国家総動員法によって軍事優先のための経済統制が進められ、金属回収とともに家庭用品を中心とした金属製品の製造禁止が決められました。このため、木製や陶製の代用品が作られるようになり、防火砂弾もそのうちのひとつとして作られたよう

です。このほかにも形の異なる数種類の砂弾が知られています。

さて、出土した防火砂弾を詳しく見てみましょう。高さは17.4cm、径13.0cmの八角形の筒形で、上面は径8.0cm、底面は径8.4cmと上下がずばまっています。容量は約2リットルです。胎土はいわゆる「白土」といわれるもので、型に押し付けてつくられたと考えられます。胴部には幅5.4cm、高さ11.2cmの長方形の面が8面あって、正面の3面には文字と模様が浮き彫りにされています。

正面には長方形の囲みの上部に爆撃機の浮き彫りがあり、その下に「砂弾」の文字がさらに四角く囲まれています。この正面の左右の面には落下する爆弾を意匠化した囲みの中に、右面には「敵は米英だ」、左面には「油断は禁物」という戦時標語の文字があります。また、正面の対面、裏面の左下に

は山の記号と「特製」の文字が陰刻されています。

終戦の前年には占領されたサイパン島を拠点に東京や大阪をはじめとする主要都市への本土空襲が行なわれるようになり、各地への頻繁な爆撃が繰り返されました。京都と奈良は古都として、ほとんど空襲を受けることはなかったといわれていますが、1945年（昭和20）1月16日東山区馬町に爆弾が投下され（東山空襲）、続いて右京区春日・太秦、上京区京都御所、6月26日には上京区西陣（西陣空襲）と5回の爆撃がありました。

こうした緊迫状態の中、金閣寺で万が一に備え置かれていたものが、幸いにもその役目を果たすことなく廃棄されたのでしょうか。

（高橋 潔）

参考資料

『<代用品>としてのやきもの』

2001年8月発行 瀬戸市歴史民俗資料館